

## 昭和61年度を振り返って

館長 友野澄雄

昭和61年度の終わりにあたり、岡山県立博物館の1年の歩みを回顧しながら、若干の感想を記しておく。

本館最大のイベントである特別展は、例年より若干時期をおくらせ10月25日から11月24日まで開催した。テーマは「日本の古窯」。平安時代末から桃山時代までの12古窯、すなわち渥美・常滑・瀬戸・美濃・珠洲・加賀・越前・信楽・伊賀・丹波・備前・亀山の代表的な焼物206点を展示した。いわば、中世古窯の全容を示す展示であった。

岡山県には備前焼というすぐれた焼物がある。そのためか、他地域の焼物についての関心は必ずしも高いとはいえない。そこで、他地域の焼物と比較鑑賞し、備前焼についての認識を改めて見直す機会ともなればというねらいもあった。

幸い多数の来館者があり、例年どおり用意していた図録は会期の終わりを待たず売り切れるという事態となり増刷を余儀なくされた。

テーマ展は「朝原山安養寺」と「岡山の肖像画」。前者は7月30日から10月19日までの3か月に近い展示であった。安養寺は倉敷市浅原にあり、その創建は平安時代といわれる。当初108体の毘沙門天像があったといわれるが、42体今に伝わる。このほか安養寺には吉祥天像（重要文化財）、裏山から出土した瓦経（重要文化財）など多くの文化財がある。これらを展示し、寺の歴史を中心に岡山の歴史の一端を紹介するものであった。長期にわたる公開ができ、その上図録まで作成することができたのは、ひとえに安養寺の御好意によるものであり、心からお礼を申しあげる。

後者は9月17日から10月19日までの約1か月間、岡山県の歴史に深い関わりをもつ人々25人の肖像をはじめ、筆跡、著作などをあわせて展示し、肖像に描かれた人の人間像を紹介するものであった。その主な人々は、法然・寂室元光・日樹・寂厳などの高僧。宇喜多能家・池田綱政などの武将。武元登々庵・武元君立・古川古松軒・藤井高尚・黒住宗忠などの学者、文人、思想家。河本一阿・野崎武左衛門などの町人等であった。

博物館講座は例年より約1か月時期を早め、5月23日から6月20日までの毎週金曜日の5日間開催した。テーマは「岡山県の歴史と文化」。受講者は67人。講師は外部から3人と本館学芸課職員6人。

本館を訪れることのできにくい地方の方のために、本館の所蔵資料をもって県下各地で展示する巡回展は、昭和50年から59年までは毎年行なわれていたが、60年から隔年実施となり、60年は実施しなかった。61年度は「岡山県の歴史と美」をテーマに、11月15日から17日まで新見市で実施した。

本年度はまた、本館を訪れる人のために、B4版・24頁の「展示ガイド」を作成した。これは、本館の所蔵品を中心に岡山県の歴史と文化を理解する上で大切な資料についての解説をつけ、本館鑑賞のしおりとしてのみならず、岡山の歴史の理解にも役立つよう配慮したものである。

本年度は入館料金の改定が行なわれた。大人（15才～64才）100円が150円に。なお、先生が引率する小中学生の団体は従来どおり無料である。

以上が本年度の主な事業の概略であるが、世の趨勢に即した博物館の管理・運営について改善を要する課題は多い。



昭和61年度特別展記念講演会より

講師 東京国立博物館陶磁室長 矢部良明氏

## 特別展

# 日本の古窯

10. 25～11. 24

日本の焼物は世界でも類を見ないほど多様で、その芸術性もわびから繊細な色ものまで、高度に洗練され、人々の生活に溶け込んで今日にいたっている。そうした日本の焼物の全体を把握する一つの鍵は中世の焼物の理解にあると思っている。また中世の焼物を理解するには、中世古窯の代表的な12の古窯を理解するのが先決であろうと思う。

岡山県には、古代に源流をもち、連綿と今日にいたっている備前焼がある。しかも好都合に備前焼は日本の焼物が成長発達する過程の中で、あたかも生き証人のようにずっとかかっている。

今日、全国各地で進んでいる中世遺跡の発掘にともない客観的に解明されることによって備前焼の足跡や力の実像が裏付けされるところとなった。例えば、備前焼が何時頃から、どのようなルートで、どの地方へ、どのような器種を、どのような規模や手段で送り出して行ったかというような流通の問題もその一つである。

しかし備前焼だけに目を向けていたのでは、各時代の焼物と生活文化を推しはかることはできないのも事実であるから、中世という時代状況、それぞれの地域文化、全国の焼物の動き、経済の動きについて、日本全体の焼物と備前焼がどのような併存関係を持ち、またそれぞれの古窯がどのような方向性や美的表現を含めた特質を持っていたかを複合的に知ることが重要である、という認識に立って、今年度の特別展を企画した。

この特別展は、中世を中心として、平安時代末から桃山時代に至る代表的な12古窯、すなわち渥美・常滑・瀬戸・美濃・珠洲・加賀・越前・信楽・伊賀・丹波・備前・亀山の代表的焼物を一堂に展覧し、それぞれの古窯の軌跡や特質を、全体比較の中で見ていこうとするものであった。さらに、備前焼と東海地方の古窯についてはその導入部分としてそれぞれ寒風古窯と猿投古窯を付加した。

これまで、全国的にみてあまりにも強大な備前焼が存在した岡山県では、他地域の古窯に対する関心は必ずしも高いとはいえなかった。そうしたこともあって、西日本では日本の代表的古窯を一堂に展覧したことはなかった。中世古窯は12古窯の他に、地方の小さいものを含めると現在全国で50ほどの古窯が確認されている。それらは地域に根ざし、独自性を保ちながらも、諸々の社会条件の中で、お互いに影響しあい、時には競合し、それぞれの方向性や消長のドラマを演じてきた。その活動エネルギーこそが、日本の焼物のレベルをここまで引き上げる源であったと思う。そうした発達を握っている中世の焼物は、武家社会の

中で、人々の生活を豊かにし、またそれぞれ独自のあたたかさや力強く野趣に富んだ美をかもしだしてきた。ある意味では、わびやさびの源流であり、日本人の美意識の本質とされるものの創成発展を中世の焼物にみるができる。今回の展覧会はそうした美と流れの展示でもあった。

そのことはとりもなおさず、備前焼とその秘められた歴史をあらためて認識する上で、また日本の中世とその文化、そして人々の生活を知るための有力な手掛かりになると思っている。

さらに私は今回の特別展に際して、わかってもらえればとひそかに思っていたことがある。それは、中世の初期にはじめて、人々は庶民の用として、庶民の手で、焼物を作るという大きな変化と自由を得たということで、これは日本の歴史において画期的なことであった。このことは、西欧のルネッサンスにも似たところがあったのではないかと私は思う。

そして中世が終わろうとするとき、つまり戦乱がうち続き精神的に疲弊しきったところにやってきた桃山時代に、人々は再度人間性を回復することにつながる高次元の自由即ちもうひとつのルネッサンスを得た。あるいは、少なくとも自由が何であるかを知りかけたと表現した方がよいかもしれない。それは茶陶を伴った焼物に顕著にあらわれた。

しかし伊賀焼にみるように、結局、二回目の波は前回ほどの社会変化のうねりにはならなかった。それは茶人という限られた社会に閉じ込められてしまって、社会的変革につながらなかったからではないだろうか。もちろん文化としては時代の中に静かに醸成されて、つぎの時代に、或いは焼物以外の分野に少なからぬ影響を与えてはいるが……。社会的にとらえれば、最初の変化の方が断然大きかったのである。もし第二波が茶人の手から一般の人々に移り、社会的な運動に展開していたら今の日本はどう変わっていただろうか。(臼井)



重文 渥美 芦鷺文三耳壺

## 主 な 出 品 物

重文：重要文化財
重民：重要有形民俗文化財
県文：県指定重要文化財

(名 称)	(所 蔵 者)	
猿投 小形双耳壺	文化庁	
猿投 皿	個人	
猿投 長頸壺	笠岡市立郷土資料館	
猿投 牡丹文経筒外容器	愛知県陶磁資料館	
渥美 刻文大壺(経筒外容器)	〃	
重文 渥美 芦鷺文三耳壺	〃	
渥美 蓮弁文壺	〃	
渥美 刻銘壺(頭長銘)	田原町教育委員会	
渥美 大甕	〃	
重民 常滑 猫かき文自然釉大壺	常滑市立陶芸研究所	
常滑 自然釉経塚壺	〃	
重民 常滑 自然釉三筋壺	〃	
常滑 長頸壺	個人	
重民 常滑 自然釉三耳壺	常滑市立陶芸研究所	
常滑 自然釉大甕	〃	
重民 常滑 自然釉大甕	〃	
常滑 不識壺	愛知県陶磁資料館	
重民 常滑 自然釉四耳壺	常滑市立陶芸研究所	
県文 瀬戸 灰釉瓶子	勝山町中央公民館	
瀬戸 鉄釉巴文瓶子	愛知県陶磁資料館	
瀬戸 灰釉印花文瓶子	〃	
重文 瀬戸 黄釉牡丹唐草文広口壺	東京国立博物館	
重文 瀬戸 灰釉巴文広口壺	梅沢記念館	
県文 瀬戸 魚波文四耳壺	愛知県陶磁資料館	
県文 瀬戸 瓶子残片	妙本寺	
瀬戸 灰釉足付片口鉢	広島県草戸千軒町遺跡調査研究所	
瀬戸 天目茶碗	〃	
瀬戸 灰釉狛犬	愛知県陶磁資料館	
織部 手桶茶入	〃	
志野 柳燕文四方小鉢	〃	
美濃伊賀 耳付花入	個人	
珠洲 経筒	石川県立歴史博物館	
珠洲 片口鉢	〃	
珠洲 綾杉文叩壺	〃	
県文 珠洲 秋草文壺	〃	
珠洲 飛禽樹文小壺	〃	
県文 珠洲 樹下鳥禽文壺	〃	
加賀 甕	小松市立博物館	
加賀 幾何文壺	〃	
加賀 壺	〃	
加賀 作見窯鶴首徳利	〃	
加賀 作見窯陶片	〃	
越前 三筋壺		宮崎村教育委員会
越前 瓶子		福井県陶芸館
越前 樹文三耳壺		愛知県陶磁資料館
越前 経筒		水野古陶磁館
重文 越前 甕		兵庫県陶芸館
越前 甕		MOA美術館・箱根美術館
越前 双耳壺		福井県陶芸館
越前 播鉢		〃
越前 小壺(おはぐろ)		〃
信楽 広口大壺		信楽伝統産業会館
信楽 甕		県立信楽窯業試験場
信楽 播鉢		〃
信楽 檜垣文壺		伊賀信楽古陶館
信楽 壺		兵庫県陶芸館
信楽 檜垣文壺		仏土寺
信楽 蹲壺		愛知県陶磁資料館
信楽 鬼桶水指		東京国立博物館
県文 伊賀 片口小壺		仏土寺
伊賀 壺		〃
伊賀 矢筈水指(筒井伊賀)		上野城
重文 伊賀 耳付水指 銘「破袋」		五島美術館
伊賀 埴田文水指		伊賀信楽古陶館
丹波 蓮弁文壺		兵庫県教育委員会
丹波 大甕		〃
県文 丹波 反口自然釉桐文壺		兵庫県陶芸館
丹波 自然釉壺		丹波古陶館
丹波 灰被自然釉壺		兵庫県陶芸館
重文 丹波 秋草文四耳壺		梅沢記念館
県文 丹波 自然釉壺		兵庫県陶芸館
寒風 自然釉大壺		長船町教育委員会
須恵器 双耳壺		岡山県立博物館
備前 播鉢		瀬戸内考古学研究所
備前 直線文壺		個人
県文 備前 四耳大壺		千光寺
備前 四耳壺		個人
県文 備前 広口花瓶		静円寺
重文 備前 筒大花生		個人
備前 緋襷大皿		岡山県立博物館
備前 三角水指		林原美術館
備前 緋襷茶入 銘「雷神」		〃
備前 緋襷大徳利		岡山県立博物館
亀山 巴文軒丸瓦		岡山県古代吉備文化財センター
亀山 大壺		広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
亀山 壺		井原市立歴史民俗資料館
亀山 壺		芳井町立郷土資料館保管
亀山 壺		岡山県古代吉備文化財センター
亀山系 播鉢		東京国立博物館
亀山 甕		福山城博物館

ほか 合計206点

テーマ展

# 朝原山安養寺

7. 30~10. 19

朝原山安養寺は倉敷市浅原にある真言宗寺院である。創建年代は不明であるが、11世紀には朝原寺の中心となる安養寺が存在し、13世紀になると浅原の地域に朝原寺と総称される数多くの寺院が建ちならんでいた。

現在の安養寺は12世紀の造立と推定される毘沙門天群像の存在で知られ、中でも兜跋毘沙門天立像は吉祥天立像とともに重要文化財に指定されている。

また、安養寺裏山の経塚からは11世紀末のものと思われる瓦経などが出土し、これはわが国屈指の内容を誇るもので、こちらも重要文化財に指定されている。

今回は、朝原寺跡より出土した古瓦や、初公開資料として同じく出土の金銅仏右手を展示するなど、多種にわたる資料を一堂に会して安養寺の歴史の一端を紹介した。



重文 兜跋毘沙門天立像

主な出品物

(◎ 重要文化財)

- |                    |      |      |
|--------------------|------|------|
| ◎木造 兜跋毘沙門天立像       | 1 軀  | 平安時代 |
| ◎木造 吉祥天立像          | 1 軀  | 〃    |
| 木造 毘沙門天立像          | 9 軀  | 〃    |
| 木造 善膩師童子立像         | 1 軀  | 室町時代 |
| 銅造 如来立像            | 1 軀  | 鎌倉時代 |
| 銅造 誕生釈迦仏立像         | 1 軀  | 奈良時代 |
| 金銅仏右手              | 1 点  | 平安時代 |
| ◎裏山経塚出土図像瓦〈阿弥陀如来〉  | 1 枚  | 〃    |
| ◎裏山経塚出土図像瓦〈薬師如来〉   | 1 枚  | 〃    |
| ◎裏山経塚出土図像瓦〈不空成就如来〉 | 1 枚  | 〃    |
| ◎裏山経塚出土土製塔婆型題箋     | 5 本  | 〃    |
| ◎裏山経塚出土瓦経〈法華経〉     | 58 枚 | 〃    |
| 宝相華唐草文軒平瓦          | 2 箇  | 〃    |

テーマ展

# 岡山の肖像画

9. 17~10. 19

肖像画とは、本来、画人が特定の人物を目の前にして、その面貌や風格を忠実に写した絵をいうが、わが国では、描かれた人物が歴史上の人物で、似ているかどうか不明な場合でも、いかにもその人物を彷彿させる画像であれば、肖像画として認められてきた。また、わが国の肖像画の特徴は、西洋のものに比べ、描かれる人物の精神的印象を重視して描くところにあるといわれる。

この展覧会では、鎌倉から江戸時代末の間に、岡山県に生まれ、あるいは岡山の歴史に関わった、宗教家・戦国武将・大名・町人・学者・文人など25人の肖像画を展観したが、特に今回は、これに加えて、彼らの筆跡や、その活動を伝える古文書など関係資料を展示して、肖像画に描かれた人々の人間像を、さまざまな側面から紹介するよう配慮した。



小野 務画像

主な出品物

(○ 県指定重要文化財)

- |         |             |                |
|---------|-------------|----------------|
| ○法然画像   | 鎌倉時代末期      | 尾道市 光明寺        |
| 寂室元光画像  | 南北朝時代       | 高梁市 頼久寺        |
| ○宇喜多家画像 | 大永4年(1524)  | 岡山県立博物館        |
| 同 畠地売券  | 大永3年(1523)  | 岡山市 西大寺観音院     |
| ○妙向尼画像  | 桃山時代        | 津山市 妙願寺        |
| 池田綱政画像  | 延享3年(1746)  | 岡山市 曹源寺        |
| 武元登々庵画像 | 寛政12年(1800) | 吉永町 中央公民館      |
| 同 門人録   | 享和3年(1803)  | 岡山県青少年教育センター隣接 |
| 河本立軒画像  | 寛政12年(1800) | 岡山市立中央図書館      |
| 小野務画像   | 江戸時代後期      | 個人             |
| 黒住宗忠画像  | 〃           | 岡山市 宗忠神社       |
| 宗忠筆「天心」 | 〃           | 〃              |
| ・「御七ヶ条」 | 〃           | 〃              |

## 巡回展

# 岡山県の歴史と美

11. 15～11. 17

新見市山村開発センター

今回から隔年開催となった巡回展であるが、本年度は晩秋を迎えた備北の地新見市を会場に実施した。本館の普及事業の一環であるこの展覧会は、館蔵資料の中から優品を選定して、「岡山県の歴史と美」を鑑賞していただくものであった。今回の展示資料の中では、近年岡山市内で発掘され話題となった銅鐸が入場者の注目を集め、また、かつて当地がたたら製鉄の産地であった関係からか刀剣には鋭い視線が注がれていた。その他、新見市内の方から本館に寄贈された昭憲皇太后下賜化粧道具は、里帰りという意味もあって熱心に鑑賞されていたし、精緻で写実主義に徹した正阿弥勝義の金工品には、会場内に驚嘆のため息がもれていた。

新見市教育委員会の協力により、寒い会期中にもかかわらず多くの方々が会場を訪れ、好評をいただいた。ただ、歴史や美術の教材となる資料を多く展示したが、近隣の学校関係の団体入場がなかったのは残念であり、今後の取り組みの課題でもあろう。

### 出品目録 (○ 県指定重要文化財)

- |                |          |            |
|----------------|----------|------------|
| 1 旧石器          | 玉野市宮田山出土 | 後期旧石器時代    |
| 2 三角縁四神四獣鏡     |          | 三国時代       |
| 3 首飾           | 上房郡北房町出土 | 古墳時代       |
| 4 袈裟繡文銅鐸       |          | 弥生時代       |
| 5 ○宇喜多能家画像     |          | 室町時代       |
| 6 紫絲威最上胴腹巻     |          | 室町時代       |
| 7 小堀遠州書状       |          | 江戸時代前期     |
| 8 池田光政元旦試筆     |          | 江戸時代前期     |
| 9 良寛額字「従容亭」    |          | 江戸時代後期     |
| 10 吾与山楽図       | 浦上玉堂筆    | 江戸時代後期     |
| 11 米法雨霽山水図     | 広瀬臺山筆    | 文化4年(1804) |
| 12 四睡図         | 淵上旭江筆    | 江戸時代後期     |
| 13 妓女図         | 柴田義董筆    | 江戸時代後期     |
| 14 図像抄         |          | 鎌倉時代       |
| 15 菊牡丹透華鬘      |          | 南北朝時代      |
| 16 本蓮寺文書       |          | 室町時代       |
| 17 草花蒔絵螺鈿櫃     |          | 江戸時代初期     |
| 18 正阿弥勝義金工品    |          | 明治時代       |
| 19 備前焼 直線文壺    |          | 室町時代       |
| 20 備前焼 筒花生     |          | 桃山時代       |
| 21 備前焼 鶴首徳利    |          | 桃山時代       |
| 22 ○太刀 銘正恒     |          | 平安時代末期     |
| 23 昭憲皇太后下賜化粧道具 |          | 明治時代       |
| 24 熊野染夜着       |          | 江戸時代後期     |

## 博物館講座

恒例となった『博物館講座』を今年度は下記の内容で実施した。本講座は「岡山県の歴史と文化」のテーマのもと、外部の専門家や本館学芸員を講師とし、館蔵の実物資料を活用しながら郷土の文化遺産を理解しようとするものである。今年度は、外部講師の方々に、発掘が進む百間川遺跡のこれまでの成果、森氏治世下の津山藩の政治、船穂町柳井原正教会に伝わる明治期の画家山下りんの宗教画、についてそれぞれご講義いただき、内容も豊かなものとなった。

本年度は開催時期を繰り上げて梅雨期をはずしたため、受講者の出席率も高く、実物資料を目の前にして熱心な講座がくりひろげられた。本年度は応募者全員が抽選なしで受講できたが、本講座も幅広い層に浸透しつつあり、一昨年のように多数の応募を受ける可能性もある。当館としてもこれらのご講義に、少しでも多くの方々に博物館を効果的に利用していただきたいと願っている。



### 講座内容

テ	マ	講	師	開講日																					
博	物	館	の	仕	事	学	芸	課	長	高	橋	護	5.23(金)												
百	間	川	遺	跡	岡	山	県	古	代	吉	備	文	化	財	セ	ン	タ	ー	柳	瀬	昭	彦	〃		
瀬	戸	内	の	海	上	交	通	学	芸	員	竹	林	栄	一	5.30(金)										
岡	山	の	舟	運	主	任	田	村	啓	介	〃														
木	工	と	職	人	主	事	八	田	真	6.6(金)															
津	山	藩	政	に	つ	い	て	岡	山	県	立	森	山	高	等	学	校	長	安	東	靖	雄	〃		
岡	山	の	肖	像	画	学	芸	員	守	安	収	6.13(金)													
農	耕	文	化	の	成	立	学	芸	課	長	高	橋	護	〃											
日	本	の	古	窯	と	備	前	学	芸	員	白	井	洋	輔	6.20(金)										
ハ	リ	ス	ト	ス	正	教	会	の	聖	画	岡	山	市	立	京	山	中	学	校	教	諭	前	田	幹	〃

## 昭和61年度購入資料

- 宮田山遺跡出土石器 1 括 旧石器時代
- 鶴山丸山古墳出土仿製鏡 (三角縁神獸鏡) 1 面 古墳時代前期
- 絹本著色 山水図画帖 1 帖 江戸時代後期  
広瀬臺山筆
- 絹本著色 帝鑑図 3 幅対 江戸時代後期  
淵上旭江筆
- 絹本著色 唐人物図 3 幅対 江戸時代後期  
淵上旭江・鼎春嶽・宮本君山筆
- 紙本墨画淡彩 山水花鳥人物図 6 曲 1 双 江戸時代後期  
白神嶽々筆
- 正阿弥勝義金工品 銀製葡萄虫花瓶 1 点 明治38年
- 木下長驥手書状 1 卷 江戸時代初期
- 池田光政書状 1 幅 江戸時代前期
- 藤本鉄石書帖 1 帖 江戸時代末期
- 備前焼四耳壺 1 点 室町時代



鶴山丸山古墳出土  
仿製鏡  
(三角縁神獸鏡)

## 昭和61年度寄贈資料

- 和書『相生双葉松』『萬徳雜書三世相』 2冊 岡山市 箱 タケン
- 備前焼 鉢・備前焼 サヤ (窯道具) 籬人形 2体 計3件 岡山市 三村喜与子
- 備中売薬 製薬関係資料 計123点 総社市 高木 作衛
- 嫁入駕籠・龍吐水・火事装束・ほかい(2)・道中着(2)・胸あて(2) 計9点 倉敷市 高尾総之助
- 唐箕 (明治14年製)・水車 (大正8年製)・万石 計3点 倉敷市 三沢 武範
- 高機・糸車・かせ車 計3点 久世町 猪頭 孝成
- とび口 1点 岡山市 伊加 勝
- 結髪・化粧道具ほか(柄鏡・櫛8・笄15・簪10・矢立3・煙草入れ・きせる4) 計43点 岡山市 鈴木 啓章
- 大八車車輪・車軸 計3点 瀬崎町 浅間 重正
- 大八車荷台 1点 瀬崎町 三村 二郎
- 寛政重修諸家譜 全26冊 倉敷市 安養寺 (敬称略)

以上、貴重な資料の寄贈を受けました。長く大切に保管するとともに本館の展示研究・資料として有効に活用させていただきます。ここにご寄贈くださいました方々のご芳名を記し、厚くお礼申し上げます。

## 昭和62年度事業のお知らせ

### ○ 特別展「教育 - その原点を求めて -」(仮称)

10.24~11.23

「教育」といえば、特に近代以降の学校教育が問題とされ、現代に至っては、その知識偏重の結果がとりざたされている。しかし、遡って考えると歴史というものが、先人から次の世代への文化の継承ということの積み重ねである以上、教育とは歴史の本質的な部分であるといえる。単に知育・徳育のみでなく、人間の生存と直に関わる面から教育を捉えることはできないだろうか。

岡山県についていえば、閑谷学校や、適塾をひらき多くの洋学者を輩出した緒方洪庵の存在などが知られるが、今回は学問のみならず、画家の修業、職人の技術の習得などにも注目してみたい。

このような観点から全国に目を向け、古くは文字の練習をした筆跡の残る奈良時代の木簡や、中世における職人絵などの資料を一堂に展覧することによって、先人の修業の姿を浮きぼりにし、ひいては教育の原点を窺い知ることができるのではないかと思っている。

### ○ テーマ展「百間川遺跡」

9.8~10.18

百間川の改修工事に伴う県教育委員会の発掘調査は、昭和51年の着手以来すでに10年を経過した。その調査の過程で、弥生から古墳時代にわたる堅穴住居跡、井戸、土壌墓等遺構が発見されたが、この展覧会では、その調査の成果を出土遺物によって紹介する。

### ○ 博物館講座

5.22~6.19  
各金曜日の5日間

普及教育活動の一環として、外部講師並びに本館学芸員により、一般成人を対象として、岡山県の歴史と文化について、講座を実施する。

岡山県立博物館だより No28

発行日 昭和62年3月31日

発行者 岡山県立博物館

岡山市後楽園1-5

☎(岡山) 72-1149